九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2020

所　　属：　　心理臨床学科

名　　前：　　河田　将一

作成日：2020 年 10 月 29 日

九州ルーテル学院大学　ティーチング・ポートフォリオ

教員氏名：　河田　将一
所　　属：　人文学部心理臨床学科／大学院人文学研究科

1.　はじめに

昨今、大学の教育については単位の実質化や教育の質の保障と教育成果の公表など、自らの教育に対するさらなる責任や外部に向けての説明が求められている。大学の教員の職務には教育、研究、学内業務など様々な役割があるが、かつて大学教員は研究者としての研究業績や論文数で評価されることが多く、教育については講義内容、使用教科書の選定など、教員の裁量のもとで比較的自由に教育が行われてきた。また多くの大学では学生による授業評価を行っているが、授業の内容についての経年的な変化について授業評価だけで検討することは難しくなってきている。ティーチング・ポートフォリオを作成することで、教員自らがシラバスや学生からの授業評価に加えて教育に対する取り組みや成果など教育活動全般について網羅的にまとめることができるメリットがある。

以上を踏まえ、専任教員として教員個別のティーチング・ポートフォリオを作成する。

２．教育の責任

九州ルーテル学院大学での私の教育責任は、第一に、心理臨床学科における専門科目と共通教育科目の担当、及びこれらに関連して特別支援学校教諭一種免許状（知的障害者、肢体不自由者、病弱者）の第一欄担当教員（2019 年度までは第二欄担当教員)、公認心理師資格の実習担当教員としての役割である。大学での職務としては、2017 年度は学生支援センター長として、学生の健康管理、休退学等の管理、障がい学生の授業等の支援、就職支援などの統括を行い、2018 年度から 2019 年度の 2 年間は心理臨床学科長として、心理臨床学科の教育・研究・学生支援に関する取りまとめ役を担い、2020 年度からは学生支援及び学生募集担当副学長として、入学前教育に始まって、学生の心身の健康管理と支援、休退学等の管理と支援、障がい学生の授業等の支援、就職支援などの統括を行っている。

第二に、大学院人文学研究科障害心理学専攻の教員として、発達障害領域の唯一の専任教授として、特別支援学校教諭専修免許状（知的障害者、肢体不自由者、病弱者）の担当及び当該領域のマネジメントを行っている。

2.1. 授業科目の担当

2018 年～2020 年度の 3 年間は以下の表の科目を担当している。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
発達障害者の心理	2018～2019 年度	80～90 名	心理臨床学科選択 特支一免必修
発達障害者の適応援助	2018～2019 年度	70～80 名	心理臨床学科選択 特支一免必修
発達援助の技法	2018～2020 年度	65～75 名	心理臨床学科選択 特支一免必修
軽度発達障害教育総論（心理等）	2018～2020 年度	65～75 名	心理臨床学科選択 特支一免必修
軽度発達障害教育総論（教育課程等）	2018～2019 年度	65～75 名	心理臨床学科選択 特支一免必修
特別支援教育論（幼小）	2020 年度	50 名	教職必修
特別支援教育論（中高）	2020 年度	20 名	教職必修
障害者教育総論Ⅰ	2020 年度	65～75 名	心理臨床学科選択 特支一免必修
特別研究	2018～2020 年度	5～8 名	心理臨床学科必修
卒業研究	2018～2020 年度	5～8 名	心理臨床学科必修
特別支援学校教育実習Ⅰ	2018～2020 年度	65～75 名	特支一免必修
特別支援学校教育実習Ⅱ	2018～2020 年度	65～75 名	特支一免必修
人間と障害（心理）	2018～2020 年度	65 名	共通教育必修
人間と障害（人文）	2018～2020 年度	85 名	共通教育必修
障害者心理学特論Ⅰ（大学院）	2018～2020 年度（隔年開講）	3～4 名	大学院選択 特支専免選択必修
障害者心理学特論Ⅱ（大学院）	2018～2020 年度（隔年開講）	3～4 名	大学院選択 特支専免選択必修
障害者支援学実習Ⅰ（大学院）	2018～2020 年度（隔年開講）	3～4 名	大学院選択 特支専免選択必修
障害者支援学実習Ⅱ（大学院）	2018～2020 年度（隔年開講）	3～4 名	大学院選択 特支専免選択必修
研究指導（大学院）	2018～2020 年度	1～2 名	大学院必修

■　主要担当科目

1．特別支援教育論（幼小／中高）

2019 年度から学部教職課程必修科目に指定されたものである。特別支援教育が通

常教育（園や学校の通常学級）においても喫緊の課題となっていることから、特別支援教育の対象、特別支援教育の制度、園や学校におけるインクルーシブ教育の展開、ユニバーサルデザインの視点に立った授業の展開、母国語が違うことで課題を抱える子どもの支援などについて講義する。

２．障害者教育総論Ⅰ

心理臨床学科専門科目であるが、特別支援学校教諭一種免許状（知的障害者、肢体不自由者、病弱者）の科目で教育職員免許法に規定する第一欄科目である。世界の障がい児者教育の体制整備の展開にも触れながら、黎明期からの教育実践を担った人々の考え方や取組の内容を概括するとともに、わが国の教育制度の確立、体制整備の流れについて学習する。幼児期から青年期のわが国の障がい児者教育（保育を含む）の黎明から今日までの体制整備の展開について、障がいのある子どもの教育はどのようにして始まったのか。どのような子どもが対象になったのか。建物や机／椅子、教材教具は誰がどうやって用意したのか。障がいのある子どもとない子どもが共に学ぶ取り組みにも視点を置きながら講述する。

３．軽度発達障害教育総論（心理等）

心理臨床学科専門科目であるが、特別支援学校教諭一種免許状（知的障害者、肢体不自由者、病弱者）の科目である。発達障がい児（言語障がい・情緒障がい・自閉症を含む）の支援においては、アセスメント等によって、その認知特性、障がい特性を詳細に理解し、長所を活かした支援を尊重しながら、当該児童生徒の二次的障がいにも配慮した支援が重要となる。本科目では、発達障がいに関する心理・生理・病理について講述する。

直近３年間の学部及び大学院での教育以外の教育実践は以下のようなものがある。

■　非常勤講師

１．熊本学園大学社会福祉学部「臨床心理学」（～現在）
２．崇城大学教職課程「特別支援教育論」（～現在）
３．平成音楽大学音楽学部「特別支援教育論」（～現在）
４．熊本駅前看護リハビリテーション学院看護学科「カウンセリング論」（～現在）

■　出張講義

１．熊本県立宇土中学校「総合的学習の時間」心理学講義（2018 年９月）
心理学のうち、対人関係の心理学に関連する講義
２．熊本県立天草高等学校「天高総合大学」心理学講義（2018 年８月）
心理学のうち、対人関係の心理学に関連する講義

3．熊本県立岱志高等学校「進学ガイダンス」心理学講義（2019 年 5 月）
心理学のうち、対人関係の心理学に関連する講義
4．熊本県立宇土高等学校「1 年生心の健康講話」心理学講義（2019 年 6 月）
心理学のうち、臨床心理学に関連して心のメンテナンスに関する講義
5．くまもと県民カレッジ「子育て支援コース」第 1 回講座（2020 年 10 月）
発達障がい児者へのかかわり方の基本についての講座

2.2. 教育組織運営

2018 年度から 2019 年度の 2 年間は心理臨床学科長として、心理臨床学科の教育・研究・学生支援に関する取りまとめ役を担い、2020 年度からは学生支援及び学生募集担当副学長として、入学前教育に始まって、学生の心身の健康管理と支援、休退学等の管理と支援、障がい学生の授業等の支援、就職支援などの統括を行い、学生教育の側方支援／後方支援を所掌している。

3．教育の理念

開学以来本学では、少人数教育による手厚い指導と机上での学修だけではなく様々な体験学習を通して身に付けた幅広い視野や知識を卒業後に社会の様々場面で生かせるような教育を目指してきた。それぞれの学科、専攻コースではさらに専門的な知識を身に付けることを目指すが、教育の根幹には自身を取り巻く人々が差し伸べてくれる様々な志によって自身の発達や成長が促され、危機からの脱出が可能となっていること等に感謝し、さらに自身にもたらされた恩恵を心にとめて他者に奉仕する「感恩奉仕」の精神を自ら実践できる人材を育成する教育を 4 年間で行うことが本学の教育理念であると考える。

また、大学院教育にあっては、当事者等との関わりや実際の学生教育等に従事している社会人の入学が多いことから、大学院生自らが主体的かつ積極的に課題を追究し、その解決に向けて当事者や家族へのアプローチだけでなく、彼らを取り巻く人々が当事者に寄り添い支援の手を差し伸べるためのストラテジーにも目を向け、奉仕の精神を持ち視野を広げた支援の体現ができる人材を育成していくことが重要である。

3.1. 理念 1　現実及び今日的課題をリアルに捉え課題を解決する力を育む

本学がキリスト教教育を基盤とし、隣人愛に根差した教育を根底に持つことを大切にしながら、私の専門領域である知的障がい児者及び発達障がい児者への特別支援教育、臨床発達心理学については、私が現在までの現場等での支援実践から得ている成果と課題について実際の現状をリアルに学生に提示することで、机上の空論とならない臨床力・実践力を身に付けられるようにする。

3.2. 理念２　当事者及び家族の心に寄り添い、当事者の強みを尊重した支援観を育む

当該児者、保護者、きょうだいの心にしっかりと寄り添い、ストレングス・オリエンテッド・アプローチ（SOA）を最も大切にした支援が展開されることが肝要であり、ひいては支援者の課題解決の突破口となり重要な鍵を握る。このことは彼らから支援する側が解決の糸口を教えてもらっていることに他ならず、そのことに感謝して、学生自らが主体的かつ積極的に支援が展開できるよう人材育成に努める。

3.3. 理念３　実践力・展開力のあるジェネラリストとしての力を育む

教育、医療、保健福祉等の実践の場に立ち支援を行うということは、様々な専門的手法をマルチに適切に選択したアプローチができる力が求められる。１つの手法の追究も重要ではあるが、本学での多様な学びを咀嚼し、多面的な実践や研究に取り組む人材育成に努める。

４. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

４.1. 実際の学校現場等の取組と課題、保護者の障がい受容等の現状を率直に提示する

特別支援教育や心理実践の現場では、きわめて多様でシビアな事例が巻き起こる。即ち、一般的な論理や支援スキルの提示では、実践的対応力として応用されることに繋がらないことから、机上の空論となることのないよう、実際の学校等の現場で行われている取組実践と課題や保護者の障がい受容等について、シビアさも含めて提示するようにしている。

４.2. 授業内容が「1 冊のテキスト」となるようにする

学生に不要なテキストを購入させることなく、授業者の講義内容そのものが 1 冊のテキストとなるように、プレゼンテーションデータを組み立てて学生に提示する。

４.3. 授業からメモを取る習慣をつける

IT 機器の進展によって、手軽に情報の作成と収集が可能となったことは素晴らしいことであるが、現場での実践及び課題解決のために他者から示唆を得る場合には、得られる内容についてメモを取る姿勢が極めて重要となる。まずもって、日常の授業においても本主旨を説明し、重要な内容を書き取るように促し、実習やボランティア等において学生自らがメモを取る習慣につながるようにする。

５．教育改善のための努力

5.1. 改善努力１　授業評価アンケートと授業改善報告書

各学期終わりに実施されている学生による授業評価アンケート結果の数値評価と自由記述のコメントのうち、改善するべき点は真摯に学生の声に耳を傾け改善するようにしている。対面式授業においては、先述の通り書き取りを重視した授業構成についての学生の負担の訴えもあることから、過度になりすぎないような配慮を行いたい。一方、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点で Moodle を用いたオンデマンド型の授業においては、私自身がシステムに不慣れで、動画の作成、システムへのアップをはじめとする諸作業に多大な時間を要してしまい、連動して学生への授業後の還元が遅滞・停滞する状況を生み出していることから、一層の適応努力をしてその能力の範囲で最大限の対応ができるようにしたい。

５.2. 改善努力２　FD 研修、授業参観での知見を活用した授業改善

本学では、例年 FD 研修や学期ごとの授業参観の機会があり、これらは本学の他の教員の授業から授業の方法や展開の在り方を学ぶ絶好の機会となっており、今後も適切に参加し、自身の授業に反映するようにしたい。

6.　教育の成果・評価

教育の成果としては、自身の理念に掲げる現場や当事者及び取り巻く人々の実際の現状を具体的に学生に伝えての授業が、学生の授業内容の理解に大きく反映されていることである。このことは、直近 3 年間のうち、2019 年度まで担当していた「発達障害者の心理」「軽度発達障害教育総論（教育課程等）」を含め、2020 年度に新たに担当することとなった「障害者教育総論Ｉ」においても、学生からは「わかりやすく理解しやすかった」との自由記述コメントを多数頂戴しており、客観的指標も総じて、授業内容の提示・解説の観点では高い評価を得ていると考えている。

７．　今後の教育に関する課題と目標

私の目下の課題は、受講学生の多い科目を多数担当しており、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点で導入された Moodle システムでの授業が大半を占めていることから、私自身の当該システムの円滑な適応が芳しくないことで、学生に迷惑をかけていることである。質問等にはなるべく時間を空けずに素早く応えていることから概ね好評を得ているものの、通信環境の異なる状況も鑑みつつ、授業動画の時間の調整、資料作成における精選、動画アップの時間（タイミング）、コメントの返信については一層の改善をしていきたい。

授業内容については、私自身の職務とのバランスが取りづらく、現場に足を運ぶ機会

が減少していることで、最新の事例の提供が難しくなってきていることが課題である。フィールドワークに基づく学生への還元が滞ることのないように努めていきたい。

8. 参考資料

（1）担当科目シラバス

軽度発達障害教育総論（心理等)、障害者教育総論Ⅰ

（2）授業評価アンケート結果

発達障害者の心理（2019 年度)、軽度発達障害教育総論（心理等）(2019 年度)